

## ピョートル一世の經濟政策 について

石川 郁 男

一 一七世紀末—一八世紀初頭のロシアの經濟  
状態とピョートル一世の改革

一七世紀末—一八世紀初頭のロシア——いわゆる「ピョートル時代」——は、政治的には絶対王政の確立、經濟的には農奴制的な、すでに部分的に崩かいしつつある貴族地主經濟の支配および興しつつある商業ブルジョアジーの形成によって特徴づけられる。

(一) П. И. Лавченко, История народного хозяйства СССР, т. 1, изд. 3, Госполитиздат, М., 1952, стр. 354.

一七世紀末のロシア經濟には、地主的な農奴主的體制的完全な支配にもかかわらず、社會的分業の成長、全ロシアの市場の形成、マニユファクチュアの發生、商品流通・貨幣經濟の發展において本質的變化がみられた。都市經濟の發展と支配的な貴族地主階級における個人的消費の増大にともなう、地主はますます多くの貨幣を必要とした。彼らは、賦役または貢租のとりたてによって、農民の搾取を強化した。農村經濟は、基本

ピョートル一世の經濟政策について

的には、現物經濟であったが、ますます商品經濟にひきこまれた。農民は、貨幣形態での租税と領主への貢納の増大によって、その收穫のヨリ多くの部分を市場で實現しなければならなかった。こうして、市場關係は發展し、國內市場への商人の定着をうながし、そこにおける商業資本の役割はたかまったが、同時に、それは、農奴的農民階級自體のうちに財産的不平等をひきおこし、農村で生産物を買入れ、市場で販賣する商賣する農民(商業農民)を生みだした。

しかし、ロシアの經濟は、當時の西歐諸國に比して、大きな立ちおくれを示していた。生産力の一般的水準はきわめてひくく、都市の手工業も、農村の家内工業も、さらに大規模な莊園の工業でさえも、増大しつつある國內需要、外國貿易の必要、國家の軍事的必要をみたしえなかった。たとえば、一八世紀初頭に、ロシアでは、年間一五萬ブロードの鑄鐵が生産されたが、この生産高は當時の英國の五分の一にすぎなかった。良質の鐵はスウェーデンから輸入され、その他の多くの工業製品も外國に依存していた。

(一) «История русской экономической мысли» т. 1, под ред. А. И. Пашкова, М., 1955, стр. 248—249.

また、軍事は弱體で、舊い封建的貴族の殘さを殘しており、海軍はなく、大砲をつくるには國內工業では不足であった。國民經濟のその他の分野においても、労働の技術と生産性はひくかった。農業と同様に都市手工業および工業における農奴

制的壓迫は、勞働生産性をたかめるあらゆる可能性をおしつづした。國家行政では、苛税で住民を零落せしめた役人や官廳の專横が支配的であり、財政は、ばく大な課税にもかかわらず、破たんにひんしていった。

一七世紀におけるトルコ、ポーランド、およびスウェーデンとの戦いは、文化、經濟、軍事のすべての面でのロシアの一般的後進性を明らかにした。當時の多くの進歩的な人々（たとえば、ゴリツィーン V. Голицын、オルジン II、ナシチョーキン A. Д. Ордын-Напокин など）は、このようなロシアの後進性が國家の存立にとって、また支配階級——地主にとって、大商人にとって、重大な危機であることを理解した。一八世紀初頭の成長しつつある國家および「全ロシアの市場」の利益、地主——農奴主階級と新興ブルジョアジーの利益は、この後進性からぬけでることを必要とした。ピョートル一世はこのようなロシアの状態を明白に理解し、彼の改革は、ロシアの一般的後進性からぬけだすという課題と結びついていた。

## 二 ピョートル一世の經濟政策に對する評價

このような社會的・經濟的基盤にもとづいておこなわれた國家行政、財政、軍事、經濟、文化のあらゆる面におけるピョートルの改革、とくにその經濟政策の性格については多くの評價があたえられてきたが、それらの基調をなすものは、ピョートルの經濟政策を重商主義的なものであるとする考えである。だ

が、ピョートルの經濟政策を重商主義的政策とするこれらの評價には、大きくわけて二つの傾向がある。

その第一は、ピョートルが西歐の重商主義を模倣して、人工的にロシアに移植したものであるとする評價で、シエリツィン・ヴェルニツ（Г. Шельце-Гверниц、*Очерки общественного хозяйства и экономической политики России, перевод с немецкого под ред. Б. Авнилова и П. Румянцева, с предисловием Петра Струве, СПб., 1901*）、*Житие П. М. Борогословский, Областная реформа Петра Великого, 1902*）、シエリツィン（П. Милков, *Государственное хозяйство России в первой четверти XVIII столетия и реформа Петра Великого, СПб., 1905*）、スヴァヤロフスキー（В. В. Свято-Вский, *Очерки по истории политической экономии, СПб., 1910*）、*Миллерин (Дм. Бабулин, Очерки по истории Мануфактур коллегии, 1939)* などがこの傾向を代表している。たとえば、

シエリツィン・ヴェルニツによれば、「ピョートル一世は、西歐思想、とくにプロシヤの重商主義によって育成され、彼の外國滞在は彼を西歐の政治思想の信奉者とし、それ以後、ピョートルは、これらにならって自己の政治をおこなひ、「ほとんどすべての西歐重商主義政策をロシアに移植した」（前掲書九一、一九八、二四九—二五一頁）。

ボコスロフスキーによれば、「一八世紀第一四半期のロシア

には、西歐に對する盲目的、機械的、無意識的模倣が少くなかつた。それは、小供が大人を、あるいは、未開人が文明人をまねたような無意識的なものであった……」(前掲書一九二〇頁)。

ミリュエーフによれば、ビョートルの經濟政策の基本原理は「重商主義の原理」であり、西歐から「借用して」、ロシアに「人工的」に移植した經濟政策が、ビョートルの全政策を破めつに導いたのである。(前掲書三九三—三九八頁)。

スヰャトロフスキーによれば、重商主義は「わが國に自然に發達したのではなくて、人工的に接木されたものである」(前掲書一一六頁)とある。

これに對して、第二の傾向は、ビョートルの經濟政策を重商主義的政策と規定しつつ、その人工的・借物的性格を否定して、一七世紀末—一八世紀初頭におけるロシアの重商主義の獨自性を主張するもので、これには、ソロヴィヨーン (С. М. Соловьёв, Публичные чтения о Петре Великом, М., 1872)、『シロフチョフスキ (В. О. Ключевский, Курс русской истории, ч. IV, Соловиз, 1937)、『リヤンチョフ (П. И. Липенко, История народного хозяйства СССР, т. 1, изд. 3, М., 1952)、『ソノフ (В. И. Соколов, Промышленная политика Петра Великого. Учёные записки Московского государственного университета), вып. 123, Политическая экономия, 1947)、『ハーン (А. И. Пашков, Экономические воззрения и

ビョートル一世の經濟政策について

принципы экономической политики Петра I. История русской экономической мысли, т. 1, М., 1955, стр. 264—317)がある。

たとえば、

ソロヴィヨーフによれば、「この動き(重商主義的政策の實施)は、非常に自然で、かつ必然的であつたので、そこにはなんらかの借物とか模倣とかいうことは考えられない。すなわち、一方はコルベールのフランス、一方はビョートルのロシアが、あたたまるために日向にでていき、太陽のあつさをさけるために日かげに入るといふ同一の衝動によって、各々の二人の人物によって、一方はヨーロッパにおいて、一方はアジアにおいて同時に行動したのである」(前掲書二二二頁)。

クリュチエフスキーによれば、「彼(ビョートル)が西ヨーロッパを知つたのは、その國家および國民經濟のなかに重商主義が支配していた時であるが、その根本思想は、周知のように、各國民は貧窮しないために、その必要とするすべてを自ら生産して外國勞働の助けを要しないようにしなければならず、また富裕になるためには、できるだけ多く輸出し、できるだけ少く輸入しなければならないということに於つた。觀察により、また獨自的にこのような見地を獲得したビョートルは、自國におつてあらゆる種類の生産をおこなうために努力した」(前掲書一一二頁)。

リヤンチョフによれば、「ヨーロッパおよびヨーロッパ經

濟を研究したピョートルは、當時ヨーロッパで支配的であった重商主義の經濟政策の潮流によく通じていた。ピョートルの國家および改革活動の經濟的・財政的狀態は、商工業の發展、生産力の向上のための政策を實施し、廣範に強制的手段を利用することを餘儀なくせしめた。だがこのことは、けつしてピョートルの經濟政策が西歐の借物であったことを意味するものではない（前掲書三五六頁）。

ソモフによれば、「ピョートルはロシアの具體的事情と歴史的課題とを理解した。ピョートルの重商主義は、独自の、當時としては獨創的な現象だった」（前掲書二四八頁）とある。

このように、ピョートルの經濟政策にかんする評價には、それを西歐の重商主義の模倣・移植とするものと、ロシアの重商主義はロシアの社會的・經濟的狀態によつてうながされた獨自的なものであり、したがって、ピョートルの重商主義的政策はたんなる西歐の借物ではないとする二つの傾向があるが、いずれにしても、ピョートルの經濟政策を重商主義的政策として規定する點では一致している。

### III スピリドノヴァ E. B. Спиридонова による評價

ピョートルの經濟政策を重商主義的と規定する従來の多くの説に對して、これを批判する動きがあり、その一つとして、スピリドノヴァ『ピョートル一世の經濟政策および經濟觀』（E.

B. Спиридонова, Экономическая политика и экономические взгляды Петра I, Госполитиздат, 1952）があげられる。

(1) スピリドノヴァとは違った角度からではあるが同じようにピョートルの經濟政策を重商主義ではないとするものとして B. H. Sumner, Peter the Great and the Emergence of Russia, London, 1950 がある。サムナーは「

「ピョートルの經濟政策は通常重商主義として述べられている……彼が富を國力的手段と考え、金銀の獲得、高率の輸入税、國家による貿易制限を重視したことは事實であり、これらすべて四つの特徴は、當時のほとんどの西歐諸國の理論および政策に程度の差こそあれ共通していた。しかし、ピョートルも、彼の忠告者たちも、コルベールや大選舉侯の體系的な政策を深く、あるいは組織的にまねたのではなかった。例のごとく、彼は、あれやこれやの方法や方策を試み、命令しては取り消して、經驗的にきまぐれに活動し、經濟の教理に關係なく、障害に打ちかち、新しい冒險に着手するために、いかなる手段でも講じた」（同書一六三頁）と述べて、ピョートルの經濟政策は重商主義と呼びうるような體系的な政策ではないとしているが、それ以上問題を開示していない。

スピリドノヴァは、この書物のなかで、多くの源泉資料にもとづいて、ピョートルの經濟觀および經濟政策を工業、商業、農業、財政のそれぞれの面から詳細に述べている。スピリドノ

ヴァの基本的な考えは、ピョートルの經濟觀および當時のロシアの經濟政策を重商主義の見解および政策と規定してはならないという點にある。スピリドノヴァは、この考えを基礎づけるために、ピョートルと西歐重商主義者との見解の類似點、相違點をあげてつぎのように述べている。

スピリドノヴァによれば、西歐重商主義者の中心的な課題は、「貨幣の獲得、富と貨幣(金・銀)を同一視すること」、「資本家階級への資本蓄積」、「流通部面(外國貿易)を富(貨幣)をつくりだす唯一の源泉とすること」、「流通部面に對する從屬的役割を生産部面にあたえること」などである。これに對して、ピョートルは、國の經濟力、軍事力の強化、生産部面の全面的發展を主要な課題としており、「いついかなる場所においても、國富の唯一の形態が貨幣——金・銀——であるという考えを明らかにしなかつた」、そして、農業および國內商業の發展を重視して、外國貿易に限定されなかつた。さらに、ピョートルは、大工業の發展を外國貿易の課題に從屬せしめた西歐重商主義者と異なつて、それをロシアの「技術的・經濟的後進性を清算する」手段とした。

- (1) スピリドノヴァ、前掲書、一六頁。  
(2) 同書、一七九頁。

スピリドノヴァは、ロシアと西歐重商主義の經濟政策の一般の類似點として、第一に、經濟生活への絶對主義國家の積極的干渉、強制、保護および規制の政策をあげている。すなわち、

ピョートル一世の經濟政策について

「一方では、保護關稅主義、工業および商業の獎勵の廣範な體系、他方では、國家による強制、規制および統制が、西歐重商主義者にとつても、ロシアの經濟家の政策にとつても同様に特徴的であつた。」さらに、第二の類似點として、輸出超過の達成、貴金屬を國內に抑制する方策をあげている。

- (1) 同書、一八頁。  
(2) 同書、二二九—二三〇頁。

しかし、スピリドノヴァは、西歐重商主義者とロシアの經濟思想家・活動家とが、これらの政策の實施によつて追求した目的および基本的な經濟諸問題に對する見解が異なつていて、これらの類似點は、一七世紀末—一八世紀初頭のロシアの經濟政策と西歐重商主義とを完全に一致せしめるには不十分であるとしている。

スピリドノヴァによれば、ピョートルおよびピョートル以前の人々は、ロシアの國家的獨立を維持する條件として、國家の政治・經濟體制の本質的改革を意識した。つまり、西歐諸國と比して遅れた國であつたロシアは、西歐諸國の植民地となるか、あるいはこの状態からぬけでるために現狀を改革するか、いずれかを選擇する必要にせまられたのである。したがつて、一七世紀末—一八世紀初頭のロシアの經濟的・政治的發展の獨自性——封建的農奴制の支配、外國貿易の從屬的役割、ピョートル時代の絶對なき戰爭、軍隊の需要——および國の經濟的獨立と國力を保證する水準にまで生産力を高めて、ロシア

の後進性を清算するというロシアの國民的課題が、ロシアの經濟思想の獨自性、ビョートルの經濟觀および經濟政策を規定したのである。だから、ビョートルおよび一七世紀末—一八世紀初頭の經濟思想に「重商主義」のらく印を押しつけることは、彼らの獨自的な、獨創的な政策および見解を重商主義という術語のかけに失わしめるものであり、まして、兩者の目的と課題が相違しており、また工業、農業、貿易、貨幣などの役割と意義が異なっているとしたら、ビョートルに重商主義者の名稱をあたえる必要があるだろうか？

(1) 同書、一九頁。

(2) 同書、一三—一四頁。

以上がスピリドノヴァによる評價であるが、ビョートルの經濟觀および經濟政策における重商主義的性格を否定するスピリドノヴァの考えには、絕對主義と重商主義の關連および重商主義に對する把握に不十分な點がみられ、カーフェンガウス B. Кафенгауз もこの書物の書評で指摘しているように、その分析は、ビョートルの經濟觀および經濟政策における重商主義的性格を否定したというよりも、むしろ、ロシアにおける重商主義の獨自性を證明したものにすぎないといえよう。<sup>(1)</sup>

(1) B. B. Кафенгауз, E. B. Спиридонова Экономическая типология и экономические взгляды Петра I. «Вопросы Истории», No. 12 за 1953г., стр. 123.

#### 四 重商主義的性格について

スピリドノヴァが一七世紀末—一八世紀初頭のロシアにおける重商主義を否定するというあやまった結論におちいった原因の一つは、絕對主義と重商主義との關連についての理解が不明確であったことによる。

絕對王政は、マルクスが述べているように、「舊い封建的身分が没落し、中世の市民身分が近代のブルジョア階級に成長したが、なお闘う黨派の一方が他方をかたづけしてしまっていないような過渡期にあらわれる」ものである。一八世紀初頭のロシア國家は、まさにマルクスのいう過渡期の絕對王政であった。一八世紀において、封建的「農奴制的絕對主義國家が、ブルジョア革命およびブルジョア國家の形成によっておわりをつけた西歐諸國と異なつて、ロシアにおいては、絕對王政は、一八世紀および一九世紀前半においても、封建的「農奴制的體制および貴族階級の階級的支配を維持していた。それにもかかわらず、ビョートルの改革と結びついた一八世紀初頭は、ブルジョアの諸關係、商業、ブルジョア階級の形成および資本主義的諸關係の前提の重要なモメントであり、一八世紀初頭のロシアにおけるこの過程は、西歐諸國の過程ときわめて類似しており、この絕對主義的ロシアと絕對主義的西歐諸國との發展の經濟的條件の類似が、國家の經濟政策の類似、階級的、經濟的、イデオロギイ的類似をよび起したのである。そして、西歐におけると同様

に、ロシアにおいても、絶対主義的権力は、その發生において、またその初期において、商工業の發展、とくに新しいブルジョアジーの發展に協力した。ここに、ロシアにおける絶対王政と重商主義との不可分の結びつき、つまり絶対王政の政策としての重商主義をとらえることができる。

(1) К. Маркс и Ф. Энгельс, Соч., т. V, стр. 212. 邦譯、改造社版全集、第三卷、三七三頁。

(2) リヤシチェンコ、前掲書、三五四―三五五頁。

(3) 重商主義を絶対王政の經濟政策とする考えに對して、白杉庄一郎氏は、「重商主義は發生的には絶対王政と不可分の關係をもっているが、その場合にも重商主義の本質を單に絶対王政的專制主義においてとらえるのは問題である」として、この規定は、「コルベルティズムと呼ばれるフランスの重商主義については、妥當であるが、オランダおよびなかんづくイギリスのそれには適合しない」としている（白杉庄一郎『近世西洋經濟史研究序説』、一九五〇年、九六―九七頁）。ロシアの重商主義は、フランスと同様に、絶対王政の經濟政策としてとらえることができる。

つぎに、スピリドノヴァによる重商主義の理解が不十分である點が指摘されうる。すでに述べたように、スピリドノヴァは、西歐重商主義者が貨幣と富とを同一視し、生産部面に從屬的役割をあたえたのに對して、ピョートルは貨幣を國富の唯一の形態とせず、生産面の全面的發展をその課題として兩者の相違を

強調している。だが、スピリドノヴァによってとらえられた重商主義は、初期の重商主義、つまり重金政策（貨幣差額政策）としての重商主義政策であった。

重商主義の初期の段階、つまり重金政策（貨幣差額政策）においては、すべての問題を貨幣の流入に歸し、金銀の流入を助長し、流出を防止する特殊な外國貿易政策を実施することによって、貨幣の流入を保障することが可能であるとした。しかし、重商主義のヨリ發展した段階——貿易差額政策——においては、貨幣の輸出を自由にしつつ、しかも外國貿易の一般的統制によって貿易を自國に有利ならしめ、輸出の輸入に對する差額を正貨で流入せしめようとした。したがって、貿易差額政策は、たんに外國貿易政策にとどまらず、輸出する商品を生産し、輸入商品を生産して輸入も減少せしめるための國內産業の保護育成を要求した。こうして、發展せる重商主義、つまり貿易差額政策は、マニファクチュアの成長・普及をうながし、商品流通だけでなく商品生産の發展をも要求した。そして、このために、國家の積極的干渉、新興ブルジョアジーの利益のための保護・育成政策がとられたのである。だから、この點で、ピョートルと西歐重商主義と區別するのはあやまりであろう。

たしかに、ピョートルの多面的な經濟活動のすべてを貨幣の流入への配慮と考え、この配慮を彼の改革の原動力とみなすことはできない。しかし、たとえ國への貨幣の流入がピョートルの經濟活動の原動力でないとしても、これが彼の經濟政策にお

いて重要な役割をはたしていたことは間違いない。なぜなら、戦争の遂行は多額の貨幣を必要とし、貨幣の存在はビョートルによって実施せられたすべての改革の重要な条件であったからである。ビョートルの経済改革は多額の貨幣を要求したが、それらの改革は、貨幣を維持し、貨幣の流入を保證する手段となつた。貨幣の流入に對するビョートルの諸政策の大きな意義を過小評價すべきではない。まして、この點でビョートルとクロムウエル、コルベール、その他の西歐重商主義者を對立せしめることは當を得ていない。

(1) バーシヨフ、前掲書、三一四頁。

貨幣の流入のためにビョートルの用いた多くの政策——たとえば、商品輸出の擴大、保護關稅、輸出超過の達成、マニユファクチュアおよび大工業の保護育成——は、重商主義に共通した政策である。スピリドノヴァは、これらの類似がビョートルと西歐重商主義者とを一致せしめるには充分でなく、また基本的なものでないと述べているが、これらの政策こそが發展せる重商主義、つまり貿易差額政策を特徴づける政策である<sup>1)</sup>。

(1) このことから、ビョートルの經濟政策を、發展せる重商主義、つまり貿易差額政策であると規定するのは問題である。重商主義は、歴史的には、重金政策から貿易差額政策に發展したのであるが、この二つの段階を明確に區分することは困難である。たとえば、イギリスにおいては、この區分ははっきりしており、はじめ支配的であつた重金政

策が貿易差額政策にかわつたのであるが、この場合、貿易差額政策は貨幣（金銀）輸出の禁止政策の廢止を意味した。しかし、ロシアの場合（フランス、ドイツ諸國においてもそうであるが）、重金政策から貿易差額政策への發展はイギリスにおけるように明確に區分されておらず、ビョートルにあっては、外國貿易の發展、輸出超過貿易の保證、マニユファクチュアおよび大工業の發展は、貨幣および貴金屬の流出の禁止と結合している。ボクロフスキーは、ビョートル時代は重商主義の二つの段階を経過したと述べている。彼によれば、初期の段階は、國內稅の統一をはかり、外國品の輸入に重稅を課し、貴金屬の輸出を禁止し、その輸入を無稅とした一六六七年の新貿易法令（オルジンナシチョーキンが提議した）にみいだされ、發展した段階（ボクロフスキーはこの段階をコルベルティスムと呼んでいる）は、ボソシヨフ И. Т. Погошков の思想にみられるとしているが、この二つの段階の區分については明らかにしてゐない。(M. H. Покровский, Русская история с древнейших времен. т. II. СПб. М., 1933, стр. 195—200.)

さらに、スピリドノヴァは、重商主義をなにかせまい、固定的なものと考え、重商主義という術語のなかに一七世紀末—一八世紀初頭のロシア經濟およびビョートルの政策の獨自性が失われるとしている。しかし、重商主義は、ある特定の國に特有



なものでなく、經濟發展の一定の段階〔1〕において、ヨーロッパのすべての國（ロシアにも）に存在した。したがって、重商主義は各國の社會・經濟的條件によつて異なつた形態をとり、まったく同一の重商主義政策がおこなわれるということはありません。たとえば、イギリスにおいては、重商主義政策は農奴制の存在なしに實施されたのに対して、ロシアにおいては、農奴制の存在のもとに實施されたことおよびロシアの一般的後進性の問題などがロシアにおける重商主義政策を規定したのである。だから、ここでの問題は、一七世紀末—一八世紀初頭のロシア經濟の獨自性が重商主義の存在を否定するということではなくて、重商主義の一つの形態としてのロシアの重商主義の獨自性を明らかにするといふ點にある。

(1) これについてリヤシチェンコは述べている、「重商主義の體系は、經濟的方面では、單一の國民市場の形成、かなりの程度の社會的分業、工業および手工業の發展、商品取

引、貨幣流通の發展、すなわち、結局封建的「農奴制的諸關係にかわる資本主義的諸關係の萌芽的形態の發展を前提とした。社會的方面では、新しい時代は、新しい社會的諸階級——その權力が貴族階級に屬していた國家において自己の地位を獲得した商業・金融・産業ブルジョアジー——の發生と強化によつて特徴づけられた。しかし、これらの新しい諸階級は、すみやかな、完全な政治的支配に到達するための充分な政治的・經濟的力をまだ持っていなかった。だから、商業および工業の發展の政策を實施する決定的な力は、ブルジョアジー自體ではなく、工業および内外商業の育成と、貨幣流通および國の全國民經濟の強化をめざした國家の行政政策の體系をともなう中央集權的國家權力である」(リヤシチェンコ、前掲書、三五五頁)。

(一橋大學普通研究生)